

心騒がすな

[聖書] ヨハネによる福音書 14章 1～11節

「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。わたしの父の家には住む所がたくさんある。もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったであろうか。行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわたしのもとに迎える。こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる。わたしがどこへ行くのか、その道をあなたがたは知っている。」トマスが言った。「主よ、どこへ行かれるのか、わたしたちには分かりません。どうして、その道を知ることができるでしょうか。」イエスは言われた。「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない。あなたがたがわたしを知っているなら、わたしの父をも知ることになる。今から、あなたがたは父を知る。いや、既に父を見ている。」フィリポが「主よ、わたしたちに御父をお示してください。そうすれば満足できます」と言うと、イエスは言われた。「フィリポ、こんなに長い間一緒にいるのに、わたしが分かっているのか。わたしを見た者は、父を見たのだ。なぜ、『わたしたちに御父をお示してください』と言うのか。わたしが父の内におり、父がわたしの内におられることを、信じないのか。わたしがあなたがたに言う言葉は、自分から話しているのではない。わたしの内におられる父が、その業を行っておられるのである。わたしが父の内におり、父がわたしの内におられると、わたしが言うのを信じなさい。もしそれを信じないなら、業そのものによって信じなさい。」

[序] 迷子になった体験

皆さんは**迷子**になったことがあるでしょうか？ 幼い頃迷子になったことがある人は、あの時の不安な気持ちというのを思い起こすことが出来るかもしれませんね。私も二度ほどありました。一度は、デパートの中で両親や妹とはぐれて。もう一度は、確か町の中で母親が買い物をしている時、気付いたら母の姿を見失い、逆の方にどんどん離れた方に進んでしまった（らしい）。小学校には入っていたかいなか位の時です。状況をくっきり覚えている訳ではないのですが、慌ててオロオロしている気持ちと、何か自分がこの世界や宇宙で**取り残されたような、泣きたくなるような、恐ろしく不安な気持ち**を抱いたことは覚えています。ですから、見つけてもらった時はホッとして、泣いてしまったように思います。「迷子」というのは、自分のいる「道」が見えなくなってしまう、ということですね。

[1] イエス様が「道」であるから

イエス様は、先週ご一緒に開いた、弟子たちの足を洗われるという出来事の後で、ご自分が弟子たちの所から離れていく（つまり十字架に架かるために捕らえられ、死ぬ）ということ、弟子たちに告げられました。弟子たちはその意味をまだ捉え切れていません。ただ、その時の弟子たちの気持ちというのは、**とても不安**であったでしょう。それこそ迷子のように、「え？ あなたがいなくなったら、私たちは、私は、どうしたらいいの？」と思ったと思います。彼らは、彼らなりの一途さを持ってイエス様にどこまでもついて行こうと思っていたのですから、見放されたような気持ちを抱いたとしても不思議ではありません。

今日の聖書の箇所が一番有名な言葉は6節の言葉ですね。「わたしは道であり、真理であり、命である。」(6a) —イエス様は、ご自分が「道」だと仰っているのです。わたしがあなたの「道」であって、あなたがそこから飛び出ない限りは、あなたは迷子になることはない、ということです。なぜかと言えば、「道」であるわたしこそ、神様の「真理」であり、「命」なのだからと言うのです。

「わたしは道であり、真理であり、命である」という主の言葉は、あまりに抽象的にも響く言葉なので、ひょっとするとリアリティーを感じない言葉として聞こえることもあると思いますが、私は今回準備をする中で、あ、これは決して抽象的ではないと思いました。自分が神様のもとから“迷子になっている”と思う人にとっては、これはとても力強い、体験的リアリティーのある言葉なのではないでしょうか？—「私はこの道に引き戻され、**霊的迷子**から解放されたのだ。そこで神様の真理に導かれ、神様の命を頂いたのだ」と。

そして、イエス様は、わたしは、“父なる神に至る”**「道」**なのだと仰っているのです。「わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない。」(6b)—この道は、父なる神へとつながっている。だから、あなた方が今後わたしを見なくなっても「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。」(14:1)とおっしゃり、すぐその後に「わたしの父の家には住む所がたくさんある」のだからとおっしゃっています。私たちの究極の「住まい」、素晴らしい慰めです。地上の生を超え、父なる神様が御用意下さる真の憩いの家。そこに至るまで、**イエス・キリスト**という「道」は、私たちを離れず、共に歩んで下さると仰っているのではないのでしょうか。

「心を騒がせるな」とありました。私たちの昨今の現実、本当に心を騒がせることばかりが多いと思います。今度の**新型コロナウイルスの問題**しかりです。「この1、2週間の間」などと言っていますが、いつまでこれが続くのでしょうか。今

週も「この1、2週間」と言うのでしょうか？ もちろん感染拡大は心配ですが、それに伴って、様々なイベントや集会が中止になり、多くの非正規の人も含め、仕事を失っている人も多いです。デマが飛び交い、パニック心理から商品の買い占めに走るも者もいます。さらには、人が集まること自体が良くないことのように思われたり、中国の方に対する偏見や、くしゃみをする人（誰でもくしゃみや咳はします）や体調がすぐれない人をどこか敬遠するような風潮がないとは言えません。そして「緊急事態」の名のもとに、権力が介入し、法律や憲法を都合よくいじろうとすることも起こりかねません。また、そうでなくとも、私たちは自分自身の心身の健康のこと、家族のこと、親の介護のこと、子供のこと等、様々な思い悩みがあると思います。イエス様は、そんな私たちに、今こう言っておられるのです。—「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい」！ 端的な、とても力強い言葉です。

イエス様は言われるのです。—こういう時こそ冷静になりなさい。そして、あなたは父なる神様を信じなさい。そしてわたしをも信じなさい、と。「信仰」とは、私たちを盲信させるものではなく、落ち着きと冷静さを与えるものなのです。

イエス様という「道」にしっかり留まっている者は、社会の風に簡単に動かされません。むしろ、じっくりとその置かれた場所に根を張って、つまり祈りを持って、誠実に自分自身が出来ることを見つけ、するのだと思います。

[2] あるシスター(福島県南相馬)の話から

最近私はこんな話を聞いてとても心が動かされたことがあります。それは福島県の南相馬市で仕えておられるカトリックのシスターたちのことです。今週で、あの東日本大震災と原子力発電所の放射能漏れ事故が起こってから丸9年になりますが、カトリック教会では震災後、特に困難な状況に置かれている人々を支える地元の活動に協力して、復興支援の施設を作りましたが、その一つに「カリタス南相馬」があります。ここは津波被害も甚大でしたが、原発からも近距離であり、多くの方が外に移りました。避難解除が出て戻ってくる人々の多くは高齢者であり、生活の再建は簡単なことではありません。そこに、決して若いとは言えないシスターたちが、今その場所に住み込んで奉仕をしているのです。

その一人シスター吉岡という方は、初めは少し様子を知るにボランティアをされたのですが、現地を見、「このまま帰る訳にはいかない」という思いが与えられ、またこれは何人かでやらないとダメだろうと思った。するとカトリック教会では、そこに修道会を作って、そこに献身する者としてやって欲しいという話になりました。修道会も出来、そして、彼女が現地の人々に「どのようなことを

してほしいですか」と尋ねますと、具体的なあれこれということではなく、「この場所に一緒に住んでほしい」と言われたそうです。確かにボランティアの人も有り難いけれど、一般の人で、ここに何度も何度も来るのは実際難しいのです。しかし家庭を持っていないシスターだったら出来るということで、シスター吉岡は多分 60 歳を超えてから、ここで仕えるようになったということです。

そこで知らされたことは何か。心の復興、人間そのものの回復には時間がかかるということです。もう関わりを持たれてから 5、6 年が経つのですけれども、サロンで一緒にお茶を飲んでも、初めのうちは、集まる人に質問もしない、お名前も聞かなかったそうです。話を強要しないのです。他者には言えない辛い思いが深くあるのです。でもある人は、その中で、ポロっと心の内を聞かせてくれたりする。そうやって、時間をかけて信頼関係が築かれて行く。そのシスターは言うのですね。—私たちの役割は**助産師のようなもの**だと。新しい命が始まるまで、その人の心音を聞きながら、この時を大切にその人と共に歩いて行くことだと。

だからこの働きの中心は何かと言うと、シスターたちが集まったの**朝のミサ**なのだと言うのです。また、お昼にも必ず自分の部屋で 30 分祈って、また人の前に出るのだと。そして、復興と言うことですが、目に見える復興も大事だけれど（土地の復興、生活の復興も）、人々が、この辛く大きな震災を通して、経済的に恵まれるよりも、経済に依存しない**本当の幸せ**を探そうとされていることを感じますと。「震災がなかったら、前の生活をそのまま続けていたでしょう。あのままでいい筈はなかった。新しい生き方を始めるのだ」と言われる方もおられます。

シスターは、これは神様からの、この場所だけでない、全世界へのチャレンジだと思っておっしゃっていました。自分は「**主の祈り**」で「**御国が来ますように**」といつも祈るけれども、本当に真剣に祈っていただろうかと思う、と。この南相馬で全く新しく生きようとしている人々、互いを受け入れあって、弱さを受け入れあって、皆兄弟のように助け合って生きている人々がいる、ここに**神様の国のモデル**があるように思える、とおっしゃっていました。この南相馬で、新しい何かが、イエス様と人々によって始まっているように思いました。

[結] イエス様がおられる所で私も生きる

イエス様があの十字架と復活の出来事を通して私たちにして下さったことは、「**場所を用意する**」(14:2 及び 3)ということです。イエス様は、ずっと私たちと共に住むために、生きるために、私たちの「**居場所**」を用意して下さい、そういうお

約束を語ってくれているのです。ヘブライ人への手紙の著者も「この地上には永遠の都はない、きたらんとする都こそ、私たちのもとめているものである」と記している通りです（ヘブル人 13：14 口語訳）。これは、私たちの生きる姿勢を新たにさせるものではないでしょうか。今、「この震災を通して、もとの生活に戻るのではなく、新しい生き方を始めるのだ」という話があったと言いましたけれども、それは、私たちみんな問われているのだなあと思います。

クリスチャンというのは、自分の罪にイエス様と共に死んで、今度はイエス様の命の中に新しくされて生きるようになる者たちです。3節でこう言っていますね。「行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわたしのもとに迎える。こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる。」と。そうです、イエス様、私たちを迎えて下さる。それは、「わたしのいる所に、あなたがたもいることになる」、イエス様が私たちを離さない、ということです。こんな欠点だらけで、自己中心で、他者を恨んだり、うらやんだりする全く「心騒いで」ばかりの人間と、イエス様が一緒に住んで下さる、と言うのです！

この世の価値観は、強い者、経済力のある者、健康な者、立ち振る舞いがうまい者が勝つというような価値観が支配しているかのようです。でも、それで本当にいいのですか、心が迷子になっていませんか？と聖書は、イエス様は問うています。一道に迷っているのなら、わたしのもとに来なさい。「わたしは道であり、真理であり、命である」！—十字架の縦棒は、私たちの罪を赦し、約束の「天の住まい」を仰がせる棒ではないでしょうか。そして、十字架の横棒、フラットな水平な棒は、全ての人が横につながって、助け合う棒ではないでしょうか？「人の子は仕えられるためではなく、仕えるために来た」(マルコ 10:45)。

大それたことは出来ない私たちだと思います。いえ、私自身です。でも、それでよいと思います。けれど、ただ、自分だけを見て心騒がしていた目線を、私たちのための「道」となって下さったイエス様に向け直し、置かれた環境の中で誠実に歩いてゆきたいと思うのです。そこには、「天の住まい」が用意されている者だけが知る、この地上では与えられない喜びがあるのだと思います。

お祈り致します。